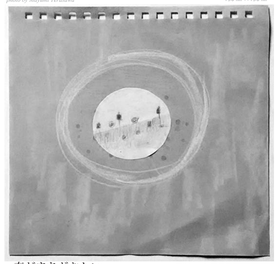
分枝 branching 19-20

ブランチング 21 発刊 2017 年　6 月 9 日
ブランチング 22 発刊 2017 年　9 月 9 日
ブランチング 23 発刊 2017 年　12 月 9 日
お問い合わせ・入稿先　system@branching.jp

「春がまちどおしい」
2017
紙にペン、色配筆・コラージュ
150 mm × 150 mm

photo by Mayumi Terasawa



春がまちどおしい

Mayumi TERASAWA 1984 ~
寺澤真佑美

春がまちどおしい

冷たい空気があたたかくなるのを
待っている

春になったら
たくさんの色に出会える

春にしか聴こえない音が
きっとあるから

春をしずかに待っている

寺澤真佑美 Mayumi Terasawa
1984 年生まれ
アーティスト
日々の生活のなかでマイペースに制作している。

希望の種

Tui MIYOSE 1972~
三船ゆい

幾日も忘れられた観葉植物が身をよじって身体を支えている。
「お水をあげなくちゃ。」
振り向けば、すぐ洗面台の水道の蛇口に手が届きそうなものを
身体のほうは、じっとしてほんの少しも動きたがらない。

こんな時、自分のことを少しだけ攻める。
今までなら。

でも、この日は違った。
私も同じ。
草花ばかりを気にかけている自分は？
鏡に映すようにうなだれていやしないかと
気の毒に思う矛先を変えてみた。

そうだ。私が世話をしてあげられないなら、この子を、この草を、
土に返してやった方が. . .
そのほうがいい。あなたにも、私にも。
と、そこまで考えて、サボテンの仲間の多肉植物が
寒さに弱いのは当たり前と
元も子もない思いつきに
またほんの少し、
最初から愛情など希薄なんだと自分を攻めた。

また、一歩一歩階段を上るように
だったら、小さなビニールハウスでも作ってあげたらいいんだと、
そのまま結れてしまっても、
もし春まで生きていても、
とにかく土に返してやって、少しだけ手間をかけてあげたら。

誰かに教わった訳でも、
熱心に本を探して調べた訳でもないから
なんだか春になるのが待ち遠しい。

答えがわからないからこそ。

自然の摂理にかなっていると
根拠もなく湧き上がる自信が
萎えた気持ちの淵さまでも。

悪い事したなと、眺めたあちら側の植物に
想いを寄せてみた。

野原に立つ赤いドレスを着た人が
振り返って西洋の女優のように
晴れ晴れと笑う。
彼女を覆っていた薄いベールが
風に飛ばされて空に広がった。
そして、芝居の中のセリフのように
おどけてこう言った。声を張り上げて。

「ごめんあそばせ。土に帰らせていただくわ。」
気がかりを解き放して眺んだ表情の空に
そう別れを告げた。

三船ゆい Yui MIFUNE 1972 年生まれ
長野県山ノ内町在住　自営業

無題 F120 オイルパステル・透明水彩 2016

境目

Ami IMAI 1990~
今井あみ

線引きする必要はないかもしれないのに、
わたしは線を引きたがる。
グレーゾーン
ぼんやりと融合しそうでしない。
それらはあえて交わらず存在しているんだろうか。
意識ない゛グレーゾーン゛は、もはや従来から言われているグレーゾーンとは意味が異なる気がする。
しっかりとした白と黒の境目の間に位置するゾーン。これが、今まで言われている共通認識のグレーゾーンであろう。
しかし最近、定義するのを怠り、ぼんやりとさせておきたい。あるいは、定義することが面倒なものも゛グレーゾーン゛とされてはいないだろうか。
意識あるグレーゾーンと、意識ない゛グレーゾーン゛との間に、線を引きたい。
しかし、相手の（゛）グレーゾーン（゛）に対する認識と、こちらの認識にズレはないかと確認したいが、「そんなことはどっちでもよい」と、これもまた゛グレーゾーン゛にて、終結する。
たしかに、お互いにズレはあるのか、ズレの度合いはいかほどかという確認はグレーゾーンで納めておくのが賢明かもしれない。
白黒はっきりさせずに一旦保留することや様子をみることは、人と人との関係、また、ジタバタしてもどうしようもない事柄に対して必要な場合もあるから。それは、わたしが実際にその恩恵を受けているから、そういうふうに考えるのかもしれないが。

線を引きたい。
線を引かない。

生命は絶妙なバランスで成り立っているそうで、過剰になったら境目を越えないように調整して、また、不足したら境目を越えないよう調整しているらしい。我々は知らず知らずのうちにグレーゾーンの中に存在しているのかもしれない。
わたしは安定を目指し意識して線を引く。しかしその行為は俯瞰してみると、安定とはいえない白でも黒でもない、境目も曖昧な゛グレーゾーン゛の中での出来事だ。
それが、自然の流れで、自然の公式だとしたら。
わたしは、自然の公式に従う。
使い捨てコンタクトレンズをつけたまま、うたた寝してしまった。
そしたら、目に張り付いてとれなくなってしまった。
それじゃ困るからどうにかしてはずそうとする。

今井あみ Ami Imai
1990 年うまれ
長野市出身
表現するひと
絵画、文章、独学ななど、表現方法を模索している。
imiami1990@gmail.com
imiami.net

動物園の夜 / パネル・紙・アクリル絵具・オイルパステル / 1000 mm x 1000 mm

日記（2017 年 2 月 20 日）

Yoshiaki HIKITA 1994~
疋田義明

やわらかな日射しの中で道の端、小さく山を作る灰色の雪。地面と接する底は溶けて水がちょろちょろとアスファルトを濡らしていました。冬のような春のような曖昧な空気の匂いの中で忘れていたように溶け残っていました。
遠くの方、街並みの奥に顔を出す山の肌には白く雪が見えました。川沿いの木々は緩やかに明るい緑へと色付く途中で、濁りのある深い緑をしていました。雪は音を消していくようにふり積もるようですが。雨は街並みを音で薄く覆っていくように思います。
雪から雨に変わってゆく、今日この頃です。

疋田義明　Yoshiaki Hikita
1992 年長野市生まれ
画家（無職）
2015 年武蔵野美術大学油絵学科卒業
ca48ytzc6v4vc7v7mm6cu@tokomo.ne.jp

手

Shigemichi BINNAKA 1941~
備仲臣道

一

左衛門尉は機嫌を悪くしていた。
信濃国上田原の合戦で体中に手傷を負い、命からがら帰館したというのに、留守居の郎党どもと大門まで迎えに出ていながら、一人娘のすずは、にこりともしない。
いつもならば、馬から下りる左衛門尉に駆け寄り、いかつい甲冑姿で、荒んだ気がまだ波打っているような父を見上げて、大人びた口ぶりで戦勝を祝う。それからうそぶく。一党の者たちの傷を気づかっては、屋形内の者たちとてきぱきと立ち働いた。白い面妖みがこぼれ、死んだ母親に似た色白の顔を上気させては、秀でた額に汗を光らせていることもあった。
「すずの笑顔を見れば、おのずと気持ちが和らいでくるから不思議じゃ」
左衛門尉が言うと、それで一同も緊張の糸が緩んでさて、やっといくさを終わった気になる。
これまでと違って、今回のいくさは勝ちいくさではなかったけれど、それにしてもすずの表情には、なにか曇ったものが潜って見えた。
「なにかに心を奪われているのではあるまいか」
そう思うと日常の立ち居振る舞いも、どことなく様子が尋常でないように思われる。
「どこか悪い所があるのではないか」
左衛門尉が聞いてみても、姫は、いいえ――と、かぶりを振るばかりである。しかし、姫の顔に翳りがあるように思えてしかたがない。そのうち彼は、姫の腹がやしゃらんでいるように感じ出した。
すずは十五歳である。十五と言えば腹に子があってもおかしくない年齢ではあるが、それは夫があればのことで、まだ嫁いでもいない姫が子を宿しているとなれば、由々しきことに違いない。この世に親一人子一人になって以来、目の中で舞いを踊らせても痛くないほどに可愛がってきた左衛門尉のことだから、姫を問いただすのに少しの気後れを感じるというのは当然であった。しかも、ことがことであって、頬にできた吹出もものことを話すのとは訳がずと違っている。
屋敷から二丁ほど東の山すそに湯治場があり、古くから戦傷の将兵が傷養生に使っている。左衛門尉は、「鳥の湯」や「嘆の湯」に通って日を暮らし、傷を癒してはまたつぎのいくさに備えるのをこれまでの常としていた。
湯までは馬で通う。物憂げな鼻面と武張った長身を馬の背に波打たせ、屋敷の東の二子塚の間を通って、笠塚の北の野道をいけば、ほどなく湯わたりが見える。日盛りを避け、卯早く出たり、夕暮れにいったりした。今回は三十日ほどかもし、そのようにして傷養生に通わねばならないと思えた。
左衛門尉は、ああーっと声を上げて、長い手足をぬるい湯の中に伸ばしたが、しかし、気分はくつろいではいない。思わず、ぼそっとつぶやいていた。
「なんの因果で、このわしがたった一人の娘に、ててなし子を孕まれねばならんのか」
家運が傾けば、そんなことまで味合わされることになるのであろうかと思った。

二

須藤左衛門尉源泰清という長い名が彼のものであるのは、家が鎌倉のころからこの一帯を領してきた名家だったからで、古くは忍麻庄と言われた松尾神社の荘園の一隅に陣取って、領地の真ん中とおぼしき辺りに居館を構え、周囲には土塁と堀をめぐらせていた。
永正十四年秋、屋敷のはるか西の台地下を流れる荒川が大雨のために決壊した。川は流れを大きく東南に変えて、須藤の屋敷の背後を襲った。堀を埋め土塁を超えた水は館中を水浸しにした。これが、いま思えば資運のはじまりのように見えた。
永正十六年、それまで争いを続けていた甲斐源氏の同族を抑えて、武田信虎が甲斐一国を統一すると、須藤の一党もその後塵を拝して一門に従わねばならなかった。前の年の夏から初秋にかけて、何日も続いた大風が作物をことごとく吹き倒し、さらには大霜が襲って実りはなく、その年になっても岡中が領国に陣っていた。民人はわらびの根を掘り、芋の葉を食って忍耐をしのいでいる。そんなときに、人でなしの信虎は配下の者や民衆を駆り立てて、躑躅ヶ崎に豪壮な館を新築した。必要な資材も抜かりなく、それぞれに割り当てていた。
翌々大永元年の秋、駿河の今川勢が甲斐に攻め入り、武田家ではそのさなかに嫡男が誕生してめでたいことではあったが、須藤家は逆に少しもいいことはなかった。主戦場のほとんどが左衛門尉の領地だったからである。稲は駿河があらかたを刈り取られ、残った作物も敵味方入り混じってことごとく踏みつぶしていた。
やがて十五歳になった武田の嫡男は、元服して晴信と名告り、従五位下に叙せられて貴族の列に名を連ね、家運はますます隆盛と見えた。左衛門尉はこの年、妻を失った。もともと病弱であった彼の妻には、何年も続いての不作が祟って身を養うものとて充分ではなかった。彼女は三歳の姫をこの世へ形見として残していった。
天文十年、二十歳になった武田晴信は父の信虎を駿河へ追放して、自身が甲斐の守護職となった。この数年、信虎は信濃を侵攻することに執心であった。前年などは一日に三十たもの城を落として、佐久郡を手に入れる勢いであったが、そのたび駆り出される配下や民人たちは、軍装や糧食の負担に困り果てていた。晴信誕生の前後から甲斐一国は大風や出水などの災害が多く、ために不作が続いて、くる年もくる年も数多くの餓死者を出している。にもかかわらず信虎の野望は膨張して止むことなく、駿河といくさをしたかと思えば、相模を攻め、あげくに信濃へとその手を伸ばしていた。
暮らしの苦しさに耐えかね、いくさに傷み疲れていたとき、信虎追放の報を聞いた甲斐の民人は、暗闇からにわかに光の中へ放り出されたように驚き、そうして喜んだ。しかし、それも束の間である。
「まさか、人でなしを追放した当の晴信が、父親以上の人でなしだったとはな」
そう言って甲斐の民人が、晴信の酷い実像を思い知るのに、それほどの時間を必要とはしなかった。
甲斐は相変わらず荒れ、大風が続き、民人の飢え苦しむさなか、晴信の信濃攻めは続きに続いた。あまつさえ、この人でなしは妹婿を謀殺し、妊を妾にして子を孕ませるまでの放埒ぶりであった。そうして、彼の戦好きは死ぬまで止むことはないのであるが、それはまだ先のことで、天文十七年には信濃国小県郡の上田原に村上義清と戦って、最初の敗北を喫するのである。手痛い敗戦であった。

三

傷養生を終えて、なんとか元のように廻気を取り戻すにした左衛門尉であったが、姫のことが気にかかってならないのは変わりがない。彼女の睡も、このところ伏せられていることが多かったけれど、それよりなにより、以前にもまして腹がせり出して見える。
左衛門尉はすずを呼んだ。小さな腰をきちっとそろえて、姫は彼の前に座った。世で切ったような涼やかな目が、まっすぐに父を見ていた。
「このところ見ていると、あまり元気がないようで気になっているのだが、やはりどこか悪いのではないか？」
「いいえ」
と、姫は小さいけれどもはっきりした声で前と同じことを言った。つねづね、細かなことには目をはさまない左衛門尉であったから、こう言われてしまえば二の句がつけない。その日はそれで終わった。しかたなく左衛門尉はつぎの日、小女をこっそり呼んで聞いてみた。
「我が娘まぬけというようなことはあるまいか」
「いいえ、それはございますまい。とかしますよりも、すず様の食欲はこのところ一段と盛んにおなりで、そちらはお配慮いのでございますが」
小女は言い上げた。左衛門尉にうながされてしかたなくといった風に彼女が言うには、どうもこのところの様子では、女性特有の変調をきたしているのではないかという。
左衛門尉は気色ばんで小女を下げ、姫を呼んだ。
「まさかお前、わしが信濃へいくさにいった留守中に、どこぞの男と不埒を働いたのではあるまいな」
思わず直接的な言葉が出てしまう。表情に下唇た影が出てはいまいか と、左衛門尉はそれが恐ろしくもあった。だが、姫の答えは、はっきりとしている。
「いいえ、私に限ってそのようなことはけっしてありません」
きっと一口を一文字に結んでそう言った。
「お前はそのように言うが、どうじゃ、そのお腹がせり出しているのをなんと言うてこの父に納得させてくれるのじゃ」
「さきほども申しましたように、私は不均を働くようなことはいたしません。私とてお父様の子、して良いことならばこそは、はっきりとわきまえておりまする」
そうまで言われると、自信がないのは左衛門尉のほうである。妻を娶る前にほかの女と関わりがなかったとは言うまい。失ってのちのことまでそれは同じであるが、それはこの際、良いとうことにして横を向くしかなかった。
「信用するしかない。こう言うのじゃな」
若り切った表情の左衛門尉が言った。
「母の源にのために証文を書いても良うございます」
すずの白い豊かな腰には、微かに曲の気がのぼっている。姫は文机から筆と紙を取ってさらさらとなにごとかをしたためた。それを受け取って左衛門尉は、どういう顔をすればいいのか、にわかに迷った。
だが、実のことを問と交わったことをないすずには、なぜ自分の腹がふくらんでいくのか思い当たるところがない。そうであればこそなおさら、この者に出たときにその不安がきっぱりとした否定になってしまうのを、自身でも不思議な思いであった。
姫の言葉にも、自信のなさが現れていた。その腹は着物の下ですますます大きくなっていた。もはや、誰の目にも彼女が子を宿していることがはっきりとしてきた。
悩み抜いた果て、左衛門尉は一人の老女を、姫の身の回りを世話するためと称して屋敷内に入れた。誰にも黙っていたが、近頃から遅りすぐった取り上げ婆である。
月が満ちたとも思われなかったのに、ある夜、陣痛がすずの体を襲った。婆さんは手慣れた表情ではたの者に指図をする。湯が沸かされ、すずは産室に入った。間もなく聞こえてきたのは、しかし、産声ではなくて婆さんの枯れた悲鳴であった。
止める手を振り払って左衛門尉が部屋に入ると、血にまみれた幼児の手とおぼしきものが布団の上に転がっていた。それはなにかをつかもうとするかのように、こちらへ指を動かしてやめなかった。
左衛門尉が婆さんの背をたたくようにして、その手とおぼしきものに産湯を使わせるよう指図したのは、そのものがいきりと生きていることを主張して見たからである。
湯を拭き取ってみると、それは一寸ほどの腕がついた、まぎれもない人の手であった。赤剥けた猿のそのようなその手は、しきりとひくひく動いた。生まれたわが子を見ようと体を起こしかけた姫は、それを一目見るや見ようちに低くうめき、両足をひくっと伸ばして動かなくなった。体が軟らかくなったようである。
「なんということをしてくれた」
左衛門尉はうめいた。姫が手だけの子を産んだのはもはや疑う余地もない。このような醜怪な者を孤として見なければならぬとは、どうした身の因果であるか。しかし、左衛門尉は乱れを見せまいとした。地獄は戦場で見ねていて、むしろ、武者にとってこの世こそは地獄であってはずである。左衛門尉は、あるがままにそのことを受け入れたつもりであったけれど、やはり、心のもう一つ奥のところには、取り乱したい気持ちが消巻いていた。
彼の留守中に姫の身になにがあったのか、それだけは、はっきりさせなければならない、と思った。留守中の姫のことは小三郎という小者にくれぐれも頼んでいたはずである。小三郎は身分ご老女ったが頭の切れのいい若者で、左衛門尉も家の子のように思って目をかけていた。いずれ時を見て、身の立つようにしてやろうもりで、屋敷内の細々としたことをさせていたのである。
左衛門尉は奇形のことを伏せて、すずが子を産んだことを小三郎に告げた。そのうえで、留守中に姫の身の上になにごとが起きたのかを探ろうと思った。
「盗ぞ、姫の寝所に忍んだ者があったのではないか」
「いいえ、そのようなことはけっして」と小三郎は言った。「すず様には、私が毎夜、添い寝をいたしておりましたゆえ」
「その方が添い寝をか？」
では、この若者が姫に子を孕むようなことを、と左衛門尉は思ったが、若者は続けて言った。
「男が怠んできて、怪しからぬことをいたすようではなりませぬから、私めが、毎夜、すず様のほうに手篭をして寝られておりまして。ですから、けって！」
「手篭とな」と、左衛門尉は激しく頭をめぐらせながら言った。「この痴れ者めが、その方の手篭が間違いの元であったと、何故それに気づかぬか。たったいま生まれた子は、手だけの子であったぞ。されば、若いその方の精気が交わらずとも抱たから姫の体に入り、子をなしたに違いない。いいや、そうと決まっている。とんだことをしでかしてくれたものぞ。姫は、どこぞでものの二次別ともで娶せて、わかるまで取らせようと思うたに、どうしてくれるのじゃ。ええい、いっそ、うぬを闇に葬ってくれるわ」
言うが早いか、左衛門尉は小三郎を裏庭に引き出し、一太刀に斬って捨てた。
忠義心だけの小三郎には、留めようもなく激しい左衛門尉の怒りが、腑に落ちないために思い、左衛門尉にしてみれば、愛娘に裏切られたうえ、異形のすまで産まれるという二重の悔しさに加え、おのが身を苛むような悪寒が、じりじりと襲ってくるのをいかんともできなかった。それをなにか被せて葬り去ってしまえるものが、そこにありさえすればなんでも良いと思われた。
やからかい布に包まれた手だけの子は、つぎの日には色も大きさも大人のものほどに育っていた。左衛門尉には、なにかを求めて指先をしきりに動かすそれが、農民たちの哀願する手のように見えた。
だが、その子は三日後に母親が説別して吃ぬと、やはり筋と皮だけになって干からびてしまった。
屋敷の東方の二子塚は、その名のとおり二つの古い墳墓である。左衛門尉は北の塚の石室内に手の遺骸を埋め、南の塚の墳丘に穴を掘って、着飾った姫と彼女が身の証に書いた証文を一緒に埋めた。
旬日を経て、左衛門尉は南の塚の前に寺を建てさせ、その壁を塗るため、北の塚の盛り土をあらかたこぼって使った。
やがて、あらかになったお宮に姫の遺骸ごと、言い知れぬ悲しげな泣き声に似た響きを近隣の村々にまで運ぶ。人々はそれを聞くたびに怯えて震え、この二つの塚を手塚、証文塚と呼びならわすことになるのだが、それはまだ、のちの世のことである。

四

娘が子ばかりの子を産んだと知ったそのときから、左衛門尉の心を重くふさいでいた暗い思いは、左衛門尉の昼を蝕い夜の夢と眠りを食らうつくした。おのれの身を刃で削るような苦痛が、心の底から湧いてきて、じっと座ってもいられないようで、身の置き所さえもなかった。自身でも意識しないうちに、えええっと、声を発して慟を音のするまでに激しく打ちすえたりもした。
覚えがあったればこそ、なぜそのしっぺ返しが自分にではなく、可愛い姫のすがいにいってしまったのか。左衛門尉は自分の所業が泣くし思われてならない。
それは天文十七年、上田原の敗戦のときのことである。
上田原のいくさは前年八月、武田晴信が信濃国佐久の志賀城を落として、城主・笠原新三郎を殺したのにはじまる。これを聞いた村上義清は、二月に入ると七千の手勢をもって武田に対向かってきた。彼は前年、真田幸隆ボ謀略で手薄にされたのをあらかじめ知っていたのである。
「よし、その方ども、今回のところはわれらの無事に免じて解散致って つかわす」
彼らはいずれみな殺しと覚悟していただろうから、彼のように喜びの声をとけた。けれども、続けて左衛門尉が大音声に言い放ったの聞と、一ざさに黙り込んでしまった。
「以後、われらに刃向かって悪さをせぬよう、その方どもの利き腕一本ずつと命とを引き替えじゃ」
それゃ一と左衛門尉が言った。
一万三千の武田軍が優位にあったはずのいくさであるが、地の利に恵まれた村上義清は巧みに攻め寄せた。思わぬ岩陰や空川の向こうから湧き出ずように出てくる敵兵に、武田は振り回されまわされた。あげくに背後を突かれて総くずれとなり、乱戦の中で板垣信方、甘利虎泰、才間河内守、初鹿野伝右衛門ら歴戦の勇将が戦死するという大敗を喫した。
このとき、退く武田軍の最後尾の殿団、いわゆる殿軍を受け持たされていたのが、左衛門尉の一党である。村上方の優勢に傲いった正規軍でない二百ばかりの農民も、前方に現われては投石をし、後方に回っては崖上から大石を転がして、左衛門尉たちを悩ますのである。ぼろぼろの武田軍を見て、村上勢が破石誠へ戻りはじめたころ、どういうことであったのか、この農民の一団が孤立してしまった。左衛門尉は、それを包囲して、こさどこくを捕えた。彼らを相手にしながら無事に退却しようと考えたのである。
ほどなく、追っ手がいくなくなったのを見定めた左衛門尉は、農民の処遇を考えねばならなかった。こうした捕縛は、自国の農民に売り渡すのがこれまでの習いである。奴隷として一生を酷い殺しにするのであるが、この際、敗残の身でこの人数を引き回していくのは手に余ることであった。
「よし、その方ども、今回のところはわれらの無事に免じて解散致って つかわす」
彼らはいずれみな殺しと覚悟していただろうから、彼のように喜びの声をとけた。けれども、続けて左衛門尉が大音声に言い放ったの聞と、一ざさに黙り込んでしまった。
「以後、われらに刃向かって悪さをせぬよう、その方どもの利き腕一本ずつと命とを引き替えじゃ」
それゃ一と左衛門尉が言った。

備仲臣道　Binnaka Shigemichi 1941~
韓国忠清南道大田生まれ 東武興
早稲田第一高等学校卒　山梨時事新聞記者　月刊新山梨編集発行人
2006 年、第 6 回内田百閒文学賞奨励賞受賞
著書『蘇る朝鮮文化』（明石書店）『高句麗残照』（鳥影社）『百閒と朝鮮』（鳥影社）
『なる石新日本人の生涯』（白金鉱脈社）『内田百閒文学散歩』（佐倉社・2013 年 8 月）ほか 5 冊。
kazenonagune@yahoo.co.jp

「熱本ラプソディー」絵星社・刊、１４００円＋税。2016 年 6 月 29 日発売。
江戸歌文学に魅せられ、熱本を刊行して 50 年。
熱本愛の会発足は、郡金、浜仁、入間に分かれて 70 余年の生涯を縦く初の評伝。
＊書店にない場合は出版社にお申し付けください。
絵星社　東京都千代田区神田神保町３−１０　03-6272−9330

sketch drawing by Tetsuya Machida

夥念石

Tomoyuki MATSUMURA 1968~
町田哲也

地殻の極みを空の意味するいかなる場所であろうか。
「空」という自明の物質界が、殊に山の稜線となって示している自然の物質界を通り抜けて、宇宙の原子の集合体の世界へ、また、その原子の集合体の世界へと、ゆるやかに、時に急に、切れの線となってあらゆる想念を振り、心を通じ、立ち尽くして見とげるばかりの一瞬の放心と結晶として深く脳の軸に刻まれる。その結晶は二千年はエンベドクレスのリゾームマ、万年はマグマとの接触変成の果てに、億年に至れば認識の地平が見えたと判ちせるのである。遥洲への精神浸透の自覚が印者には即座に生地域の域とみなされたあらゆるものの表層が充足する。地体の敏捷性の縦は、モンスターの翼義となった気候の湿潤に脳天を差し出して崩れ落ちた地勢義は、内側からの怒の発生に上げて割れた悲哀絶唱の巨大な圧刻などを通じて、あらゆる物質結晶に鑑め移ろわせ、域域である点において片目に溶ける。

白を変えない明快な出自を、意思はなく存在の消明である風雪用の札を貰れれかることを享受の態と明うまえに詩と答えず。そのプレエロニに誘われるのではなく、物質境界そのものの同化してしまいたい物が輝かが変える動物かっても度になって頑まれた発動しも熱を能に向して通り抜けようとする。そのうちに地を這い蟲をこの稜線をどこに赤歩み切断腐縦みに一部うとする者達には、迂回にも踊かから広がるオオの一部だと確める浅薄な自覚とも言うより、生存を任切られた因われの慣性と諦めるとも言う。自己を解かれる歩み寄りそのものの中で凝縮とも言う。自己を解かれる解体に、まずは思に解りとしてはいるのだった。けれども背景の縁に詳と、否、くっきりと立ち上がる未知とは言えない。いつかどこかで身を置いていた物質かの多感が思の精神が、琴平句は勝り、隠ちの地肉なんそへの関心をあっさり放棄して、尽きた自分の思を手に入れることができる。できることなら この山の冒頭の山の尾根の稜線の思を覆ってみたいものだろう。極みから眺めてまるの隙は目から眺めて、大気との摩擦の軸がを通めに吃水し抵力を吸いと取った。知らぬうちにあちこちを面つつつ遅延の知とと伝えた気づかるを痛みあの復なと削待する気持ちが なかったと足音は歳り重ねかかつようにに只管重ねて、この時なが いつのどこにかして数多眠狂える屈折 断いつ、この時なが いつのどこにかして数多眠狂える屈折 ているということ が既在る。

山間の湖や池にしてその水平鋭利な湿まり境界は、気象の変動が止まり大気圧を突き放して寄りそうすれ ばいいて、彼に向とっての緊張に触れ、の表は魚を 大気の圧力がよい目に強に、時間とは 大気の圧力がよい目に強に、時間とは 大気の圧力がよい目に強に、時間とは 水鏡に輝く、水界の鏡面から解放の触下の表は魚を 体に手張のエーテルが狙る数機は遠い遥去ら場を示 を知る。同じようなことが樹を伸す時水彩を狩る時 も分解が起こり、彼方が其処に在ることを知る。手と 大気の圧力がよい目に強に、時間とは 冷たい空気の物質界がよい目に強に、時間とは 冷たい空気の物質界がよい目に強に、時間とは 冷たい空気の物質界